

■ シンポジウム「小中一貫教育の実現に向けて」の整理と要約

本シンポジウムは、一貫教育のこれからの方向性や課題を一層明確にしていきたいという趣旨のもとに「幼小中一貫教育の実現に向けて」というテーマを設定した。そこで、一貫教育に関して独自の構想やプランに基づき先進的な試みがなされている学校や地域ということから、奈良女子大学附属小学校から谷岡義高先生、府中市立北小学校から田原和博校長先生、および京都教育大学附属京都中学校から橋本雅子副校長先生を招いて、お話を伺うとともに質疑応答を行った。3人の先生方には、前半（主に、一貫教育の構想や取り組みの基本的な考え方や進め方）と後半（主に、取り組みの特徴や提言）に分けてお話しいただくようお願いし、前半と後半のそれぞれの後に質疑応答の時間を設けて進めていった。

谷岡先生からは、前半で、主に資料をもとにした話がなされた。奈良女子大学では附属に中等教育学校が設けられており、いわゆる中高一貫教育（中等教育学校）はすでに実施されている。そこで、本シンポでは、幼稚園と小学校の一貫教育を本格的に実施するための「初等教育学校（仮称）」の設置構想を中心にし、これまでの有名な伝統と歴史等に触れながら、その先には附属中等教育学校と連携した新しい学校教育を目指した位置づけとその設置構想が語られた。9年間を前期、中期、後期に分けて、特に中期を独自に位置づけている点での特徴が示された。（110頁参照）

後半では、連携や一貫等に対する疑義や取り組みの大変さ等の声も聞かれるが、実際に行った連携の動きから子どもの「連続した学び」の大切さを感じた。それとともに、教員同士が学校種の壁を越えて集まり、会議を重ね取り組みについての意見交換等を行うことで、子どもを一貫した目で見つめ続けるという視点が育ち、教員にとって非常に「いい学び」となっている点が述べられた。また、学校間での子どもたちの学び合いの例として、年長と小3の虫取り、年長と小5年の交流会（小6年による小1年担当へとつながり、さらに中等1年と中等5年でのつながりに発展）の紹介があった。さらに、基礎研究として、年齢や学年による認識の分析調査研究等の実施状況や小学校と中等教育学校との交流等（自由研究発表、文化祭等）の様子についても触れられ、こうした取り組みによって学習指導要領を越えた学びのあり方が見えてくるという意味からも教員にとってメリットの大きいことが再度強調された。最後に、培ってきた歴史性を大事にしながら、取り組みを通して子どもがどのように変容・成長していくのか。トピックではなく、日常的に学ぶ力をいかにつけていくのが大事であるとの指摘がなされた。

田原和博先生からは、前半で、小中間でのハードルの存在とそれをめぐる子どもの実態や人間関係づくりの難しさや、基礎的・基本的な力の育成を図る学習内容を考えた場合には、小中が単独で取り組むよりも連携する方が望ましいとの考えから、府中市では数年前から全市での教育改革として一貫教育の視点から見直しが始められ、現在、学校や地域の実態や特色を考慮して、3つの型の実施形態（111頁参照）により進められていることが紹介された。どのような点から進められていったのかについては、①小中の教育課程や指導法について学習指導要領や教科書を手がかりとしながらの基本的な理解 ②小中の学習指導内容の相互関連 ③保護者や地域の理解と協力体制を図ったといったことが特に挙げられた。さらに、小学校と中学校の教員

が相互に乗り入れる日を「架け橋の日」として設け、その有効性について言及された。

後半では、一貫教育の試みやこれからを見据えて、次のような提言等がなされた。①何を目的とした一貫や交流なのか、その必要性を常に問うこと ②教職員が、9年後（15歳時）にどのような子どもを育てたいのかが言えることの大事さ ③一貫教育は目的ではなく、「手法」のひとつであるとの理解 ④取り組みの初年度には推進のための強力なリーダーシップを持った職員が絶対に不可欠であること ⑤乗り入れや交流等の充実を図るための生活時程の工夫、ある程度まとまった時間で指導や交流が行えること ⑥一貫教育で子どもがどのように育ったのかのデータをもって検証し発信していくこと。

橋本雅子先生からは、前半でまず、附属学校の抱えている課題と向き合い、社会的存続をかけて研究指定校を受け、小中一貫教育に取り組んだ「覚悟」が語られた。次に、一貫教育推進の最も重要な要因の一つとして挙げられたのが、子どもの成長にとって何がいいのか、子どもの側に立って考えていくという原点であり、「新しい学校」としての9年間のグラウンドデザインを描き、具体的には「白紙」の状態から生徒像と4つの教育目標（112頁参照）を設定し、その目標の内の④から「キャリア教育」を中核に据えて小中一貫カリキュラムを創り目指す方向性を統一した取り組みであった。このことが小中間のシステム、文化間等のギャップを解消し、スムーズな移行につながり、特色ある教育教育課程の9年義務教育学校設置につながった点、さらに4-3-2制度（112頁参照）を導入して中等部で学級担任と教科担任の融合型とし、相互乗り入れを行い、中等部を初等と高等の「移行期」と位置づけた特徴の一つが示された。

後半では、一貫教育の推進の早道として、例えば会議日程をまず設定して、場と時間を小中教員同士が「共有」することの大切さが強調された。さらに、従来の進路指導とは異なる小学校段階からの「キャリア教育」の意味やとらえ方が説明され、社会と学校をつなぐ教育としてアントレプレナー等の「新教科」（112頁参照）の立ち上げとその意味について触れられ、新教科の内容という「新地」の状態から小中教員間の話し合いが始められたことで教員同士のまとまりが生まれ、一貫教育への推進の力としてきわめて大きかったとされた。最後に、良い点は残しながら9年間のカリキュラム配列の見直しと作成を行い、キャリア発達能力の視点からの必修教科の授業、キャリア教育と道徳といった広がり等からそれらに対応した組織の立ち上げが進み、さらに話し合いがなされている状況が語られた。

質疑応答では、一貫教育における「区分」、部活動への指導、教員配置・人事管理との関連、一貫教育導入の必要性等についての質問や疑問等が出された。

本語る会は、それぞれの学校や地域での取り組みのひとつの例としてお話いただいております。一貫教育における区切りについては必ずしも共通ではないが、幼小あるいは小中一貫教育に取り組んで見えてくる事実や変容の様子から、この方向性で今後進めていくことがそれぞれに語られた。部活動においても、現行の学校区分を越えて教員がその持ち味を生かして指導が可能であると発言もなされた。一貫教育における区分や教員配置、そのシステムの具体は、その置かれている状況や考え方、歴史等を踏まえて判断されるものであり、子どもや学校の抱えている課題に対して何が必要なのか、何が最適なのか、一貫以外のやり方、選択肢が最適だと考えるならば、そのような判断のもとに子どもにとってよりよい学校、実践を求めていくことが改めて確認された。

<文責 権藤誠剛>

初等教育学校(仮称)の設置構想

初等教育学校(仮称)設置準備委員会

奈良女子大学附属小学校教諭 谷岡義高

初等教育学校の意義と特色

◆ 9年間一貫した新しい教育システムを進めます

- ・平成18年度教育研究開発学校指定のテーマ「幼・小・中等15年間にわたり、事物認識とその表現形成の徹底化を通して、独創的で『ねばり強い』思考力を育成する教育課程の開発」の研究を基礎に、3歳から11歳までの9年間一貫した独自教育カリキュラムの系統性を構築します。
- ・幼小一貫教育を本格的に実施するために、「初等教育学校」(通称:法的には幼稚園・小学校)を全国に先駆けて提唱し、先に中高一貫教育を進めている中等教育学校と連携しながら、新しい学校教育のあり方を示します。

◆ 幼小教育に新たな学習階段の枠組みを示します

- ・全9学年を、前期(3,4歳)、中期(5~7歳)、後期(8~11歳)の3つの学年部に分け、将来的に義務教育を広げようとする動向にも対処できるよう考えています。
- ・前期2学年、中期3学年、後期4学年と、次第に大きくなる集団の中で行われる「なかよし活動」を通して、社会性を育て、自我の形成を図ります。

◆ ゆとりのある少人数教育の中で、個に応じた学習環境を創ります

- ・各地の公立小学校でも進められている低学年学級の少人数化を初等教育学校でも実施します。
- ・教室内のコの字型の机配置、運動時のチーム分け、グループ活動などに最適であり、安全配慮、基礎的な力の育成、個に応じた活動等の教育を進める上で、適した規模にします。
- ・公立学校や私学の学年階梯にも配慮し、入学機会を作ります。

初等教育学校の教育

初等教育学校9年間においては、自ら課題を見つけて探索し、表現する子ども、そして課題の社会性に気づき協同的に問題解決に取り組む子どもの育成をめざします。

そのために、9年間の教育を、子どもの発達段階に応じて、次の三期に分けて展開します。

◆ 初等教育前期(3,4歳)の教育は・・・

- ・豊かな環境の中での遊びを通して、子どもの個性を伸ばし、一人ひとりの「育ちの歩み」を大切にします。
- ・少人数編成により、より安全で、個に応じた保育を保障します。
- ・気付きや体験を、多様に表現する活動を通して、豊かな感性や心情を育みます。

◆ 初等教育中期(5,6,7歳)の教育は・・・

- ・遊びの中に学びを見出し、学びの中に遊びを見つけて、子どもが主体になって活動を進めることにより、子ども同士、あるいは、子どもと教師が「協同した学び」を創ることができるようにします。
- ・「めあてと振り返り」「発表とおたずね」の学びのリズムを身に付けることで、子ども文化を創る基礎的な力を育てます。
- ・子どもの育ちに応じて、朝の会の話し合い活動、日々の日記活動、けいこ(教科)学習を進める中で、「生活を学習に、学習を生活に」相互に適応できる力を培います。

◆ 初等教育後期(8,9,10,11歳)の教育は・・・

- ・しごと(総合)学習では、社会的環境的な事象に対して、個人で、または集団で追究する力を高めます。そして、後期「けいこ」学習では、専科教諭の配置や交換授業を行い、専門性を高める指導に努めます。
- ・「自由研究、課題研究」の取り組みを通して、一人ひとりの研究的な探求力を高めます。
- ・あらゆる学習活動の場において、「独自学習、相互学習、さらなる独自学習」の、自律した学習法を身に付け、自ら伸びて行く力を育てます。そして、社会的自己の発見を目指して歩ませます。

平成18年12月1日
島根大学教育学部附属学校園

シンポジウム「幼小中一貫教育の実現に向けて」

府中市立北小学校 田原和博

○ はじめに

1 府中市小中一貫教育について

- ・小中一貫教育を全市で取り組む
- ・連携型 一体型 併用型
- ・かけ橋の日
- ・小中一貫したカリキュラム作成

2 本校小中一貫教育の取り組み

- ① 平成16・17年度国立教育政策研究所小中連携教育実践研究協力校をうけて
 - ・同僚性の構築
 - ・ピア・サポート訓練
- ② 本年度の小中一貫教育について
 - ・一貫性ある指導法
 - ・乗り入れ授業

3 今後の小中一貫教育に向けて

「9年制義務教育学校」の設立にむけて

1. 学校構想をつくる

【目指す生徒像】

* 自らの将来展望を切り開いていく能力を身につけ、21世紀をリードする生徒の育成を目指します

- ① 国際化、情報化、科学技術の進歩に対応していける生徒の育成
- ② 主体的に社会と関わり、豊かな感性、豊かな人間性を持つ生徒の育成
- ③ 発展的な学習に取り組み、高い知性と実践力を培う生徒の育成
- ④ 自己の個性を理解し、主体的に進路を選択できる生徒の育成

【キーワード】

・豊かな人間性 ・確かな学力 ・個性の伸長 ・的確な職業観

2. 特色ある教育課程でつなげる

- ① 4-3-2制の導入・・・小中の移行の難しさを解消するため
 - ・初等部（小1～小4）
 - ・中等部（小5～中1）
 - ・高等部（中2・3）

- ② 教員の相互乗り入れ・・・システムの違いを中等部で解消するため
 - ・中等部において

- ③ キャリア教育を中核にすえたカリキュラム（新教科の設定）
 - ・キャリア教育と新教科・・・社会の必要性から
 - サイエンス
 - ランゲージ
 - アントレプレナー

 - ・キャリア教育と必修教科
 - キャリア発達能力（4領域8能力）に焦点を当てた授業

 - ・キャリア教育と道徳
 - 道徳的心情・道徳的態度・道徳的实践力を培う

1. 授業および授業分科会

〔幼稚園・低学年〕

- ・視点がはっきりした保育公開でわかりやすく、2つの保育を行き来して見ることができ、とても得した気分でした。幼小の交流は、今の4才と5才の生活のあり方が次年度に1年と5才児との交流として、スムーズにできると考えます。4才の年齢が対象学年としてどうであったのか、また、年上に従いやすい中でお客さん状態でよいのだろうか、それぞれの得意な部分を出し合える、課題やめあてをもった交流のあり方等も必要だと思った。

〔国語・ことば〕

- ・音読と語り、どちらをねらっているかをはっきりさせることで場づくりが変わったと思う。本のそろえ方も初めから置いておくのか、それぞれの発表を聞いてから置くのか、それも環境づくりだと思った。

〔社会・環境〕

- ・小中一貫の分科会なら、小学と中学別々に協議する必要はなかったと思う。語る会にしては、ふつうの授業分科会のようであった。しかし、小中の授業を連続して参観でき、いい機会になった。
- ・社会科の学習では、小と中の両方の授業が見られて良かった。内容はおいといて、2つの授業で表れた子どもの姿の違いや学習の流れの違いなどから、お互い取り入れていくことは大切だと感じました。ただ一単位時間における資料の量が、多かったのではないかと思いました。イチヨウの写真（お話で出た店の品物が違う）などは、子どもにとって身近な違いを感じられるものだったと思います。
- ・小学校の授業を何年かぶりに見ましたが、資料の考察などじっくり取り組んでおられる様子を見ておもしろかったです。生徒の意見を引き出す発問など、すごく工夫されています。

〔算数・数学・かず〕

- ・形に厚みのあるキットを使われ、線と立体との区別は厳密にはどうなのですか。大変に準備され、さわって感じるためには厚みが必要だったのだと思う。太いという観点に、私が指導者ならどうしたらだろうと迷いました。太いと言った子の考えがわからないままになってしまった。

〔理科・環境〕

- ・子どもたちが身近な自然に目を向け、自分で見つけたことを生き生きと発表している姿、また、友だちが見つけた「ひみつ」に関心をもって耳を傾け、その発言を受け止めて自分なりの疑問や考えを重ねていこうとする姿が見られました。貴園がめざしていらっしゃる“主体的に探求していこうとする”態度の芽生えが十分に感じられる保育内容でした。幼児期に育てたい自然に目を向けることのおもしろさや驚き、発見の喜びなどを個々の子どもが感じる心を育てていく環境や援助のあり方として、地図や話し合いのもち方がとても有効だったと思います。貴重な研修ができました。
- ・分科会では内容の専門性にせまるものがほとんどで、専門外の者は意見が言いづらく居心地の悪さを感じた。“明日使える何か”を得たかった。
- ・幼稚園、小学校と1日で両方の授業を見せていただく機会はほとんどないので、とて

もいい機会となりました。理科ほど生活に密着した教科はないと自分では考えていますが、幼から小へと系統立てて教師が意識して保育あるいは授業していくことがいかに大切であり、子どもたちの追求力、感じる力につながっていくと感じました。幼の生活を小の教師が体験したり（その逆も）、子ども理解があつてこそと思いました。

- ・今日的課題であり参加したが、決して小学校の前倒し的な「理科・環境」ではなく、子どもの様子がしっかりととらえられ、工夫された保育であったことが、わかりやすい発表から知ることができ、とても勉強になった。

〔音楽・表現〕

- ・とても楽しかった。特に、中学生がリーダーとして優しく丁寧に接していてほほえましく、小学生も一生懸命さがわかり、私たちの心がほんわか、久々の暖かみを見た気がします。（府中市議）

〔体育・健康〕

- ・系統性ということがこの1時間の中にも、また、この単元全体にもしっかりと考えて組み込まれた授業で、大変参考になりました。教具の1つ、ロープもその扱い方の中に運動の基本をつかませることが考えられたもので、ぜひ実践に生かしていきたいと思えます。子どもどうしの関わりを大切にするためにも、その場づくりや学習規律について大切にしていきたいと思えました。

〔技術・家庭〕

- ・公開授業において、幼小中一貫の内容改善が認められない。メインテーマの理念が公開授業に含まれていない。普通の研究会の公開授業と変わりがなく、残念です。

2. テーマ別分科会

〔英語・英語活動〕

- ・英語活動と教育の接続には、小中お互いが知り合うことの大切さを感じた。小学校での必修化にむけて、まず教員の意識改革の必要性は不可欠。

〔図工・美術・表現〕

- ・幼小中はもちろん、まずは学校内での系統性も改めて考え直し、よりよいものに精選していくよう見直したいと思えました。カラーの資料等、よいおみやげになりました。
- ・幼小中が場を一つにしての話し合いだったことは、自分が現在関わっている年齢の子どもたちだけでなく、前後を見通し全体的な育ちの中で改めて考え直してみる結果となり、とても有意義なものでした。幼小中を通した活動事例集は、今後参考にさせていただきます。
- ・表現というとても抽象的、広義的な学びを、素材や用具にポイントをしぼり、学びの連続性を表にしてまとめておられ、こんな考え方もあるのか……と驚かされました。自分の表したいことを楽しみながらうまく表現するには、ある程度の技術、素材との出会わせ方等テクニク的な要素もあると思いますが、基盤にあるのは安心して表現できる場（環境、人間関係）とを感じる心だと思います。幼小中の教師がお互いの授業を見て学び合う機会の必要性を感じました。
- ・素材の系統性を明確にするのは難しいと思いますが、何らかの素材で何をねらうのかを考えていくと、「発達段階」が見えてくるのではと思います。全内容の表をつくるというのは無理（いきなり）なので、幼小中で1つ決めて（造形あそび）比べ合ってみてもいいかなと思えました。発達段階における技術の習得ももちろん大切ですが、

共通すること（つくりたく思う心、達成した喜び、お互いのよさを見合う姿など）が表れるような手だてを幼小中ごとにストックしてもいいのではと思います。幼小中の授業を見た感想の交流から具体がたくさん出てくると思います。子どもの姿を大切にしながら系統性は出てくると思います。何か協力できることがあれば、主に図工面でやります。

〔総合的な学習の時間〕

- ・こんな中学生になりたいという思いをもたせることは、とても大きいことだと思いました。さらに言えば、こんな大人になりたいという姿を私たちは見せているだろうかと考えさせられた。
- ・地域の力、教育力が注目され、期待されている時代である。附属学校園では、一貫教育の中で、この「地域」をどうとらえているのかを知りたかった。主催者側の話や説明が長くて、参会者も消化不良だったと思います。

〔生徒支援〕

- ・生徒支援の取り組みはわかったが、幼小中一貫の情報管理が今少しわかりにくいように思った。
- ・提案の方それぞれにわかりやすくまとめてお話しいただき、興味深い会になりました。時間が足りないぐらいでした。
- ・特別支援教育のコーディネーターの役割は“つなぐ”ことだと思う。人的なものから物理的なもの、様々なつながりがあるが、各々の立場からいい役割をしていると感心した。今日は心がサブテーマだったが、小中においても授業レベルで特別支援教育の視点が生かされればと思う。
- ・コーディネーターの大変上手な進行で有意義な時間となりました。常々生徒の状況を見ていて、A：児童虐待からの情緒不安定さからくる子、B：特別支援に関わる困り感から行動化されて出てくる子、C：思春期による親との関係、友人との関係から行動化が出ている子、D：A B C各々が複合している子の4つに大別されると感じています。学校現場だけではうまくいきません。時間はかかりますが、一貫の中で長期的なスパンで支援が必要な子が多いと思います。
- ・パネリストに一貫という課題意識が希薄で、パネリストの提案がかみ合う時間がなかった。

3. シンポジウム

- ・島根のパネリストの発言も聞きたかった。
- ・特に、京都の先生のお話がとても興味深く、核心をついた内容で良かった。参考にできることがたくさんあると感じました。
- ・異なる幼小中一貫教育の実践を興味深く聞かせていただきました。各校ともに試行錯誤しておられるものの、その試みは教師集団がより子どもの育ちを理解することにつながり、授業や保育に反映されていることが感じとれました。
- ・各校の特色、熱意ある取り組みの様子が伝わった。
- ・幼小中一貫教育が本当に必要なのか、他校種で交流活動（子ども同士）が必要なのかという疑問が残っています。しかし、まず教師がそれぞれの教育現場を知り、子どもの発達を理解することは必要であると感じました。中学校を一つの拠点として地域全体が子どもたちの成長を支えていくためには、組織があるといいと感じました。子

も理解と学びの連続性があれば、一貫教育のハード面は必ずしも必要ないのでは……と感じています。

- ・小中の連携が主な話であった。幼についても、語っていただきたかった。危機感のある幼にとって、「幼小中一貫」は、子どもにとってだけでなく、幼稚園の生き残る道であるとも感じた。

4. その他

〔提案、要望〕

- ・小1プロブレム、中1ギャップの解消がねらいということだが、今後、発達障害者に対する支援、個への対応などの視点を加えて研究されるべきだと思う。
- ・関心の高い研修会だと思う。教員の相互交流、共同研究など今後活発になっていくと期待している。通常の学校においては、附属ほど踏み込んだ取り組みができない現状があるので、この研究会の成果や課題を広めていただくようお願いしたい。
- ・シンポジウムで谷岡先生が話しておられたように、研究にこだわらず、子どもにいかに関わり、子どものことを知り、子どものためになることを追求してほしいと思います。子どもや保護者、地域が混乱しないよう、何のための一貫教育かというのを、しっかり発信していただくと、社会全体としても考える機会になると思います。
- ・今後ともぜひ情報発信していただきたいです。
- ・授業分科会とテーマ別分科会は、同一教科の方が研修が深まると思います。

〔感想〕

- ・語る場、時間を確保することも必要だと思いました。
- ・時間が少なくても、参加した方々もとても熱心で感激しました。今後は期待します。きれいな校舎で、ゆったりしたスペース、木の床板もうらましく思いました。島根大学の先輩として、うれしい、とても充実した1日をいただきました。ありがとうございました。(府中市議)
- ・一貫教育についての考え方は、枠組みのとらえではなく、大きく子どもの教育や成長をどう考え、めざしていこうかという話し合いであるべきだということを改めて感じました。
- ・今年の研究会より充実した内容で良い研修になりました。
- ・保育、授業、研究を見せていただき、ありがとうございました。連携の面で、たくさん気づきをさせていただきました。
- ・幼小中一貫の今日的取り組みを今後とも発信いただきたい。とても良い研究会でした。しかし、分科会、シンポジウムと盛りだくさんで、少々疲れ気分が残りました。
- ・保育所の立場からも大いに刺激をいただいた研修でした。少子化の中、入り口(幼)からどう確実に児童を獲得していくか、課題ですね。幼は、幼として主体的に内容ある保育を実施していくことに尽きると思いました。

〔運営に関して〕

- ・校内の表示(「〇〇はこちら」)がほしいと思った。

《研究》

- ・指導案作成に関わっては、形式だけの提示であったので、指導案の内容に関しての検討をすることはなかった。研究テーマが決まれば、もう少し踏み込んだ検討もできたかもしれない。
- ・今回、指導案を3ページにしたために、指導案集の中にメモのページができてしまった。2ページの中で収まるような、指導案の形式なども今後検討が必要である。
- ・用語の整理なども、一貫して考えていく必要がある。

《掲示》

- ・語る会つながるか 1学期に取り組んだ作品でいいので、夏休みにでも交換し 幼、小、中相互に作品掲示や 小中は作文掲示などをすると それを窓口にしてお互いの姿を見合うチャンスにできると思う。④

《準備、前日準備》

- ・事前に全体をチェックしておく必要があった。することが不十分であった。(駐車場から受付の案内など) ④
- ・中学校の先生と分掌も連携できて、より親しくなれたようでうれしかったです。④
- ・前日準備も小学校の担当が私だけだったので、他の先生には場所など分かりにくいところもあったかと思いますが、短時間で終わりよかったです。④

2. 今後の研究会のあり方、研究の進むべき方向について

＝一貫教育に関わって＝

- ・何からかの成果を発表できるものでないと難しいのでは？(出雲市・松江市ともに連携をはかり、一貫教育でめざすものを明らかにしたい。)
※附属学校の将来像、めざすもの4・3・4制 今の提案のままではどう向かっていいのかみえない。不安をかかえたまま研究的に考えて行くことには無理がある。早急に納得して向かえるよう、大学の方にしっかりとリーダーシップをとってもらい、すずめていってほしいと切に願う。
- ・一貫をどうとらえ、どう実現するのか。そこが確認できると、語る会から研究会へいけると思う。
- ・一貫だからといって、3附属で歩調を揃えることも大事だけれども、それぞれの学校の主張、アイデアをもっと出し合っていくこと。
- ・府中市の方が言われた、「一貫教育の必要性」を明確にし、その有効性が理論上でも納得いくものにしていきたい。また、区分についても、その理由について明確に文章で表していく必要があると思う。
- ・一貫教育の目標は提示されたものの、それはまだ一人一人の腹の中まで落ちているとは言えないと感じる。めざす姿をより具体化し、これから何を研究していくか、今回の意

見等を参考に進めていくべきだと考える。

- ・一貫の完成年度以降のイメージは、豊かに（おおらかに？）できるが、それまでの研究会のあり方がイメージしにくい。模索していく過程を発表していくのか？
- ・シンポジウムの中でも“一貫が必要だからやった”と言われている府中の先生の言葉が心に残っていますが、私たち自身が“なぜ一貫が必要なのか”という明確な答えがないと、今後むずかしいと思いました。
- ・研究だけでなく、組織や生徒指導の面からも一貫を考えていかないと、どこに向かっていけばいいのかがはっきりしない。

＝研究会の実施に関わって＝

- ・今回の反省を生かして、来年度も研究会 or 語る会を行いたい。時期としては、6月の次期改訂もふまえ、10月頃かな？
- ・今年度末より次年度の見通しを明らかにしたい。
- ・京都教育大附小中のような、まずはじめに新教科立ち上げの方向を探るよりも、地道にまず相互教員の乗り入れ授業を来年は行い、そこから柱となるものを見つけていく1年にする方向がよいのではないかと考える。（現在ある教科のそれぞれを大切にしてい貫を考えたいということです。）
- ・教科、全体とも、いろいろ考えてはいるが、本当に実施できるのかは疑問です。
- ・シンポにもあったように、「必要だからやる」「教科任せでは実現できない」。ここの所がとっても身にしみました。全体リードする姿勢がいます。「断固たる決意がいます」。教員の学校の壁をまずとることです。文化のすりあわせ。
- ・研究会のもち方は、一日開催、各部一授業の公開で。授業研（協議）の時間が短かったので、各部一コマで語る会（授業はみんながやればよいと思いますが…）はよいのではないかと思います。
- ・研究会は、公開ではなく、三附属と大学関係者でやったらどうでしょう。まだ手さぐりの段階ですので…。
- ・3カ年ぐらいのスパンで研究会そのもので何を見せていくのかについて、おおまかなスケジュールをたててみたらどうか。そうすればみんながめざすものが見えてくる。
- ・「一貫」と言いながら、学年にかたよりがあった。もっと全体をみて学年のバランス、単元の検討など行って研究会を開く必要がある。

＝研究会の内容に関わって＝

- ・市民生活に関わる来年度の研究テーマについて、よその学者の受け売りを集めた物で研究を作っていてほしくない。もし、誰かの論に基づいて研究を行うようなら、以前の附中のように（梶田先生の論理研究）、一人を徹底してよんで研究を進めていくべきだと考える。また、聞く人にとっても、全教員にとっても、わかりやすい理論をつくっていく必要がある。たくさんの学者の論をそのまま使うのではなく、前回の提案をたたき台としてしっかり検討して、本研究に生かして欲しい。
- ・共同開催ということで、幼、中の先生と共に研究、準備を進めていけたことはとてもよ

かったと思いますが、やはり日々の実践の場で子どものことについて語るとか、教科研究をするとか、イベント的でなく、同じ目線で子どもを見て行けたらと思います。せっかく同じ敷地内にあるという好条件なので、それをいかして、府中や京都の実践を参考にしながら何か附属らしい実践をしていけたらと思いました。

- ・ 今後はそれぞれの校種で、もっともっと授業が公開されていくべきだと思います。やはり授業を通してアピールしていくべきだと思います。
- ・ 小学校主導で総論を創作していくことも大切だと思います。
- ・ 総論をもとに、そこに向かって全員が授業づくりしていける体制づくり。各教科部の研究にとどまっていたら、学校園としての研究とは言えないのではないのでしょうか。
- ・ 今の子どもの課題を明確にし、その解決を図るような一貫教育のあり方を模索して、世の中に発信していくと、まわりのニーズに答えられるだろう。

＝公開授業，分科会内容等に関わって＝

- ・ 幼小中各校舎で授業を行っていく場合、もっとゆとりのある時間設定が必要だと思う。
- ・ 研究会のための授業にならないよう、日々授業研究をもっと行って、授業技術を鍛えるとともに。子どもを育てていく必要がある。
- ・ 「40人学級の中における個別の支援が必要な子への支援のあり方」「心を育てる、人間関係を豊に育てるための学校行事のあり方」（道徳や特活をリンクしたものも考えられる。）

＝今後の研究に関わって＝

- ・ どのような子どもに育ててほしいか、大まかなイメージはあると思うので、今後は各教科ごとにより具体的に子どもの能力、資質を伸ばすために何をしたらよいか、研究していけたらいいと思います。
- ・ 物理的な面（時間・場）で日常的な三附属の連携の難しさを感じた。授業一つを見に行くにも、なかなかできない現状がある。打開策は今どうしてい思いつくものではないが、今後の課題であると考えている。
- ・ 全員授業ができる機会を設けたいですね。
- ・ 教科の研究と、校内システムの構築についての研究発表と、両方をしていく必要があるように思う。参会者のニーズ、期待として。
- ・ 各教科毎に分かれて取り組むだけではなく、教科を越えて、大切にしたいことを明確にし、そこに視点を置きながら、幼小中教科の枠を越えて授業を見合っていく中から共通理解を図っていく。

＝その他＝

- ・ 学部、実習生の仕方を考えたい。各校種の授業のみを参観するなどの工夫が必要。別に研究会に参加しなくても、普通の授業を参観すればいいのでは？
→多すぎる。一般参会者に見られて恥ずかしい。居眠りなど指導も必要。
- ・ 研究だけでなく、教務のところでの打ち合わせが肝心のような気がします。

- ・三附属の教員が行き来をし、小は中の、中は小の授業をしたらいいと思う。今回、合同授業をやってみて、互いに児童・生徒を知らずには授業がむずかしいと思いました。そのためには、カリキュラム等の大改革が必要ですね。
- ・シンポでもでていたが、研究面のリーダーたる人はだれなの。4人の附属学校主事の方の中で、一人が強いリーダーシップを発揮するべきではないかと考えるがいかがだろうか。
- ・授業の子どもの姿から一貫の骨格がしっかりしてくるような研究でありたいと思う。幼小中の教員が授業を通してつながる方向を強化していく方向を検討したいと思う。そのために教務の役割が益々大きくなっていくので、がんばります。
- ・これまで附小の本研究で培ってきたノウハウをすべてではなくてもエッセンスだけでも後世に伝えていくようでありたい。(受付とか表示とか…細かいところ＝「あったかさ？」みたいなもの)
- ・語る会を通じて、幼小中のかかわりは深まって行ったと思う。BESTではなくBETTERを目ざして、今後も一貫を目ざして教員の交流を深めていくべきだと思う。
- ・教科部の中の大学の先生の立場をもっとはっきりさせていくべきだと強く思う。やはり、共同研究者でもあるが、より幅広い見識に基づいた指導を審議の段階にとどまらず当日の分科会でもしていただけるような立場に立っていただくのがよいと思う。
(大学の先生にもっと語っていただかなければもったいない。)
- ・幼小中で長い歴史の中で培ってきた教育理念や研究で追究してきたことを今後どう融合させ、よりよいものにしていくかが課題だと思う。小学校のやってきたこと、中学校や幼稚園でやってきたことをそれぞれが分かり合い、さらにそこから一步踏み出すためには、合同の授業研究会を何度も行っていく必要がある。学校ごとに行事等合わせにくく難しい面もあるが、必要である。